

チャールズ・テイラーの多元主義的政治理論——「世俗主義」の再検討を中心に

高田宏史

本稿ではテイラーの政治理論とカソリシズムとの関係を明らかにしたうえで、それが今日の政治理論においていかなる意義をもちうるのかを考察する。

本稿は二部構成を採用している。第一部は第一章から第三章までにあたり、テイラーの著作の時系列に沿った内在的理解をつうじて、主としてなぜテイラーがカソリシズムを自らの政治理論のなかに明示的に導入しなければならなかったのか、という問いとテイラーのカソリシズムがどのような内容を有しているのか、という問いに答えることを目的とする。第二部は第四章から第六章にあたり、テイラーのカソリック的多元主義に基づく政治理論を様々な思想家のそれと比較することで、主としてテイラーのカソリシズムと政治理論、とりわけ多元主義との関係はいかなるものであるのか、という問いと彼の「カソリック的」多元主義は、現代の政治理論においていかなる意義を有するのかという問いに応答することを目指している。

第一章では、『ヘーゲル』から『自己の源泉』に至るテイラーの思想的な歩みを、テイラーがヘーゲルのなかに見出した哲学的・政治理論的課題との一連の格闘の歴史として提示する。それは、『ヘーゲル』において明示された、全体性と個別性の媒介を通じた和解という課題に、テイラーがどのように取り組んできたのかを明らかにすることである。そして、この課題に取り組むなかで、テイラーがなぜ・どのようにして「ユダヤ・キリスト教的伝統」を自らの思想のなかに明示的に導入しなければならなかったのかを明らかにすることがこの章の目的である。

第二章では、テイラーの「超越性」観念がいかにヘルダーにおける「神」観念と相同性を有しているかを明らかにすることによって、彼のカソリシズムが、いわばヘルダー的相貌を帯びていることを明らかにすることを目指す。テイラーにおける「超越性」は、必ずしも意志をもった人格神ではなく、ヘルダー的な非人格神の影響を多分に受けているのである。

しかしこうしたテイラーのカソリシズムに対しては、前述したように「無神論への敵意」がしばしば指摘されてきた。それゆえ第三章ではこうした批判がどのような論拠に基づいているのかを明らかにした上で、『世俗の時代』においてテイラーがこうした批判を回避しているのかどうかを精査する。『世俗の時代』においては、その内容に関して言えば形而上学的な立場の多元性が『自己の源泉』よりも肯定的なかたちで定式化されており、かつ方法論的にはテイラーが「新ニーチェ主義」の思想家としてこれまで批判してきたミシェル・フーコーの系譜学的手法を取り入れることによって、「無神論」を肯定的に取り扱って

いるのである。

第四章では、しばしば「コミュニタリアン」として同列に語られることの多い、マイケル・サンデルの多元主義とテイラーのそれとを「世俗主義」の観点から比較することで、テイラーの「カソリック的」多元主義が、サンデルの世俗主義的（かつ共和主義的）なそれと比べて、どのような特徴を有しているのかを提示する。彼の「カソリック的」多元主義は、世俗主義的な多元主義においては等閑視されていた「近代の複数性」という事実に光を当てるものなのである。

第五章では、テイラーがリベラルな世俗主義——あるいは世俗主義的なリベラル・デモクラシー——の直面する難問であると考え、「カテゴリーに向かう暴力」の問題に、テイラーが彼の「カソリック的」多元主義の立場から、どのような処方箋を提示しているのかを明らかにし、その意義を考察する。その際、テイラーと同じく——しかしテイラーとは異なった「イスラム」という基盤から——この問題を精力的に論じている、宗教人類学の泰斗、タラル・アサドの議論とテイラーのそれとを比較する。テイラーは、政治的知恵としての「赦し」をもって暴力批判を展開するが、そこには固有の限界もまた存在していることを本章では指摘する。

第六章では、テイラーとは世俗主義的リベラル批判に関しては多くの論点を共有しながら、テイラーとは異なり「無神論」という立場から世俗主義の修正を試みる政治思想家、ウィリアム・コノリーの多元主義論とテイラーのそれとを比較することで、テイラーの「カソリック的」多元主義がデモクラシー論においていかなる意義を有しているのかを示す。両者の議論は、デモクラシーの原理がそれ自体として多元主義的でありうるのか、あるいはデモクラシーの原理はそれ自体のみで安定しうるのかという問いにたいする独創的な解答を提示しているのである。

そして結論において、これまでの議論を総合し、テイラーの「カソリック的」多元主義が有する意義と限界を分節化することで、本稿を閉じる。テイラーはイバン・イリイチにしたがって、善きサマリア人の寓話をそのキリスト教的デモクラシー論の核に据えている。そしてまた彼は、イリイチにしたがって、あらゆる道徳的コードへのフェティシズムを危険なものとして退けてもいる。しかし、こうしたテイラーの新しいデモクラシー論の展開は、彼のこれまでの政治的コミットメントとのあいだに緊張関係をもたらすものではないのか。この問いの探究を以って本稿の結論とする。